

京都大学教育研究振興財団助成事業

成 果 報 告 書

平成 27 年 7 月 2 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士後期課程2年

氏 名 大 西 貞 剛

助成の種類	平成27年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	第18回国際ラテン語学会 18th International Colloquium on Latin Linguistics		
発表題目	Latin 'nouns of instrument' with the suffix <i>*-ti-</i>		
開催場所	フランス・トゥールーズ トゥールーズ大学ジャン・ジョレス校		
渡航期間	平成27年 6月 8日 ~ 平成27年 6月13日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券	165,750円
		交通費	8,000円
		宿泊費	97,950円
日 当		57,700円	
	学会参加費	20,600円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団の助成によって渡欧して本学会で発表を行うことができ、添付の「成果の概要」における成果を挙げることができました。ここに厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。		

### 学会概要

本学会はラテン語を対象言語とした学会であり、2年に1度開催される世界で最も大きな学会である。1週間に渡って、歴史言語学、統語論、意味論、語用論などのパネルで合計100の発表が行われており、およそ世界30カ国から合計130名以上の参加者が参加した。2015年はトゥールーズ大学ジャン・ジョレス校で開催された。次回は2017年にミュンヘンで開催される予定である。

### 発表内容

ラテン語には接辞 *\*-ti-* を持つ少数の名詞が見つかる。その接辞はインド・ヨーロッパ語族の共通祖語の段階において名詞を派生するために用いられたものであると考えられている。その語形について、Reichler-Béguelin (1986: 65) は "接辞 *\*-ti-* を持つ名詞はラテン語において "道具名詞" に最も良く見られる" と言及しているが、その一方で何を「道具名詞」と定義するかについては言及していない。本発表では "道具名詞" を "(動詞語根) の動作を遂行するための道具" として定義し、ラテン語で実際に在証されている語形を収集してその語形の意味を確認する。その結果、上述の様な "動作を遂行するための道具" という意味を持つ語形は必ずしも多くないことが明らかになる。また、他のインド・ヨーロッパ語族の言語に目を向けても、このような "道具名詞" として現れる語形はむしろ数が少なく、少なくとも共通祖語の段階で "道具名詞" としての名詞を派生する機能があったとは考えにくいことがわかる。むしろ接辞 *\*-ti-* は特定の意味を伴わず動詞語根を名詞化するマーカーとして付加され、その結果誕生した名詞が後の時代の意味変化を得て、"道具名詞" としてのみでなく様々な意味を伴った語形としてラテン語に残されていると考える方が適切であることを主張する。

参考文献: Reichler-Béguelin, M.-J. 1986. *Les noms latins du type mēns: Étude morphologique*. Brussels: Latomus.

### 発表後に得られた反応

質疑応答やその後のコーヒブレークの際に、接辞 *\*-ti-* と接辞 *\*-t-* の区別の議論も盛り込んだ方がいいというアドバイスや、発表者が動作主名詞の一例として挙げた古期アイルランド語の語形は接辞 *\*-ti-* を持つのではなく *\*-nt-* の連続を持つものではないかという指摘を参加者から受けた。また、ウンブリア語に見られるある語形が接辞 *\*-ti-* を持つものなのか、それとも *\*-tio-* に遡るものなのか、という議論をする機会もあった。質疑応答では標準階梯の接辞 *\*-ti-* とゼロ階梯の接辞 *\*-ti-* で意味に違いはあるのか、という質疑を受けた。少なくとも

も共通祖語の段階で "道具名詞" としての名詞を派生する機能が主であったとは考えにくいという発表者の主張に反応は概ね好感触であったと考えている。

### 学会参加による成果

申請者は以下の 3 点の目的を持って本学会に参加した。その成果は以下である。

1 点目の目的はラテン語を専門とする研究者からフィードバックを受けることであった。本学会への参加で、言語の通時的研究を専門とする研究者に加え、共時的研究を専門とする研究者達からも幅広いフィードバックを受けることを狙った。その成果として、上述のように質疑応答では様々なアドバイス、指摘を受けることができた。また、発表者が現在考えているアイデアについてコーヒーブレイク中に議論することができ、これも非常に有意義なものであったと考えている。本研究成果は本学会の予稿集に投稿予定である。

2 点目の目的は今後の研究の視野を広げることであった。他の研究者の発表を通じて、ラテン語に対する様々な研究方法やアプローチを学ぶことを狙った。そのため、歴史言語学だけでなく統語論や形態論のパネルにも参加した。それらの発表を通して、どのような理論的手法があるのか、およびその基本的な文献についても知ることができた。特定の分野に偏るのではなく、それらの理論的手法についてもこれから理解を深めていきたいと考えている。

3 点目の目的は研究者とのネットワークを作ることであった。本集会は若手研究者の参加も多く、本学会に参加することで今後の研究生活に不可欠となる研究者間の国際的なネットワークを作ることを狙った。その成果として同じラテン語などイタリック語派の言語を通時的視点から研究している大学院生数人と知り合うことができ、どのような本や論文があるかといった情報交換をすることができた。また大学で教鞭を取る研究者とも知り合うことができ、発表者自身のアイデアを議論する機会を持つことができた。このネットワークは今後の発表者の研究生活で必ず財産となるものであると信じている。

### 謝辞

貴財団の助成によって本学会で発表を行うことができ、上述のような成果を挙げることができました。ここに厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。